

ハサミとの和解

エッセイスト・作家 平松洋子
ひらまつ ようこ



最近あらたに覚えた道具がある。その存在はよく知っていたのに、自分と結びつけて考えたことがなかったのは間抜けなことだった。

高枝切りバサミ。

通販雑誌やカタログなどでしばしば見かけるし、近所を散歩していると、家の庭木をチョッキンチョッキン、小気味いい音を鳴らして高枝切りバサミを使っているお爺さんを見ることがある。晩秋、路上に立ってこれを巧みに操り、庭先の柿の実を収穫する姿に出会うこともあった。あんな便利なものをいつたい誰が考案したんだろうと思いつながら、それ以上の関心を持たなかったのは、わが家の小さな庭は二十数年ずっと植木職人さんに剪定を頼んできたか

こんな簡単なことを、なぜさっさと思いつかなかったのだろう。赤面しながら連れ合いに話したら、「あ、その手があった……」と恥ずかしそうに言うので、破れ鍋に閉じ蓋とはこのことだと内心思う。

さあ急げ。Amazonで検索して購入した最長5メートルの飛び道具は、すばやく2日後に届いた。翌朝、待ちきれずに庭先に出てチョッキンチョッキンとやると、面白いように切れる、切れる。自分が長腕怪獣にでもなったつもりで活躍し、都合5日ほどかけてにわか植木職人を気取り、剪定を終えた（ただしひとりにつき1日1時間。それ以上続けると集中力が切れ、首と腕に筋肉痛が走る）。

夏の朝、汗みずくで高枝切りバサミを握りながら、7、8年ほど前から台所で使うようになったキッチンバサミのことを思っていた。料理道具としてのハサミの効用を知ったのはずいぶん前だったが、自分で使うのには長らく抵抗があった。韓国ではキムチや焼肉を切るときに必需品だし、シェフが魚介を料理するとき活用することも多い。小回りが利いて便利そうだなと思いつながら、自分の台所に導入しにくかったのは、包丁仕事をサボっているような気がしたからなのだった。単に保守的な態度のせい。

じつは、もう一つの呪縛がかかっていた。子どもの頃、母の裁縫箱の中に2本のハサミが仕舞われていた。黒い取っ手の大きな洋裁バサミが1本、紅白

ら。蛇の道はへび。梅雨の終わり頃、伸びた枝葉を小ざつぱりと整えるプロの技を愛でながら、ズブのシロウトは手出しをするものではないと肝に銘じてきたのである。

ところが今年、いつもの植木職人さんがやたら忙しく、うちの順番がいつこうに回ってこない。後回しになっているのだからかと焦っているうちに檜やオリブやミカンの枝葉はぐんぐん繁茂し、日毎に屋内が暗くなっていた。日当たりも悪くなり、外に干す洗濯物の乾きも遅い。

どうしたものか。頭を抱えていたら、突然ピカリときた。

（高枝切りバサミがあれば、自分で切れる）

の糸が柄に巻きつけてある小さな和バサミが1本。これを使ってみたくて、母に聞かずに裁縫箱を開け、紙の着せ替え人形を切り出しにかかった。和バサミはうまく使えなかったが、洋裁バサミの切れ味のよさときたら！ 幼稚園で使う先端の丸い黄色のハサミとは段違い、スイスイ進む快感がたまらなく気持ちいい。

「だめでしょ！」

いきなり飛んできた母の叱り声に凍りつく、次の言葉が降って来た。

「紙を切ったら、布が切れなくなる」

あわててハサミを離しても動悸がしばらく収まらず、私は自分が切り出した着せ替え人形がうらめしかった。同じハサミの形をしていても、むやみに何でも切ればいいというものではないらしい。そんな負の感情に呪縛されてきたから、おとなになってもハサミ関係に対して出遅れた。

しかし、いったん馴染めばしめたもの。身体と直結する道具ほど心強いものはない。今朝だって、いわしの尻尾やヒレをチョッキンチョッキン切り離したばかり、包丁より早い。

喰わず嫌いという言葉があるけれど、自分でも恥ずかしいくらい、いったん翻意したらあつけない。あんなに遠巻きにしていた高枝切りバサミも、もう手放せない。

時の調べ Essay

略歴

1958年岡山県倉敷市生まれ、東京女子大学文学部社会学科卒業。食文化、文芸などの分野を中心に広く執筆活動を行う。2006年、『買えない味』（筑摩書房）、第16回Bunkamuraドゥマゴ文学賞受賞。2012年、『野蛮な読書』（集英社）、第28回講談社エッセイ賞受賞。2022年、『父のビスコ』（小学館）、第73回読売文学賞受賞。近著に『筋肉と脂肪 身体の声をきく』（新潮文庫、『本は誰かを連れてくる』（毎日新聞出版）など。2026年8月 最新刊『赤いするめ、黒いするめ』（文春文庫）